

## 図書紹介

徳山耕一氏寄贈 徳山雅宥著『浪速の舞楽—その伝統の粋に魅せられて—』（乗誓寺、2000年）



本書は、天王寺楽所雅亮会（以下、雅亮会と略称）理事徳山耕一氏の父雅宥氏が生前に雑誌『四天王寺』に発表された論考24篇を中心とする遺稿集である。

1200有余年の歴史を有する天王寺舞楽は、明治17年（1884）に発足した雅亮会によって悠久の伝統が今に守り伝えられている。毎年4月22日の聖霊会舞楽大法要（重要無形民俗文化財）は、古来より大阪の人びとに親しまれ、大阪を代表する春の風物詩である。

本書は大きく二部に分かれており、「第1章 四天王寺と舞楽大法要」では、明治維新によって天王寺楽所が解体し、その消滅を惜しんだ西本願寺宗主大谷光尊師の尽力により聖霊会が復興され、雅亮会が発足して以降の歩みが格調高い文章で綴られている。「第2章 天王寺舞楽の縁故を温ねて」は、谷地八幡神社（山形県）・能生白山神社（新潟県）など、天王寺舞楽に源流をもつ各地の舞楽見学記である。生き生きとした文章からは、遠く離れた地に天王寺舞楽の伝統が守られていることへの著者の感動が鮮やかによみがえる。著者は縁故の地を訪ねるだけにとどまらず、その地に伝わる舞楽と天王寺舞楽との共演を実現しているが、共演に際しては、互いの伝統を尊重する姿勢が貫かれている。雅亮会は、大阪フェスティバルホールで雅楽公演会を開催するなど、新機軸を打ち出している。その一方で、伝統を尊重する姿勢を頑なまでに守り伝えている。本書を一読すれば、それが1200有余年にわたって、大阪の人びとに親しまれてきた“天王寺舞楽の魅力”の源泉なのだということを理解できる。

本書は、天王寺舞楽や雅亮会の歴史を知る一書であるのみならず、近代大阪の人びとが文化遺産の保存と継承にいかに向き合ってきたかを知る上で必読の書である。本書が市販されていないことが惜しまれる。

（櫻木 潤）

陶山計介氏寄贈 陶山計介・妹尾俊之著、大阪ブランドコミッティ企画協力  
『大阪ブランドルネッサンス 都市再生戦略の試み』（ミネルヴァ書房、2006年）



本書は「都市ブランド戦略」の理論と実践を体系的に考察した書である。ブランド研究の先覚者であるステファン・キング（Stephen King）は、ブランドを「製品を購入・使用する上で能動的な意味づけを加えるもの」とする。ブランド構築の対象は、製品だけでなく事業・企業・産業へと拡大されてきた。そして近年、都市もまたその対象として注目を集めつつある。大阪ブランドコミッティによって展開される「大阪ブランド戦略」は、日本における最初の本格的な都市ブランド構築の試みである。

本書の構成は大きく3部に分けられる。第1部では都市再生にブランド構築を導入した先駆的事例を考察しながら、都市ブランド戦略の理論を提示する。第2部では大阪を舞台にした都市ブランドを構築する上で、資源となり得る魅力を持つ要素について検討を加える。そして第3部では、大阪活性化に向けた都市ブランド戦略を展開するための指針を提示する。

本書はその終章で、都市再生が日本の国家的な課題となっていることを述べる。そして現在大阪で推進される都市ブランド戦略が、他の都市にとっても都市再生のモデルとなり得ることを提唱するのである。

（内田吉哉）

## 図書紹介

『関西がひらく産学官連携の新たな地平』（財団法人関西社会経済研究所、2006年）



関西社会経済研究所は、関西の発展を目指して運営されている総合政策シンクタンクである。その活動報告として毎年刊行されているのが「関西活性化白書」であり<sup>i)</sup>、関西経済に関する情報収集と産業構造の分析を行なっている。本書は、その「関西活性化白書」の2006年版で、「産学官連携」を特集としてタイトルにも掲げたものである。

産学官連携の成功例としては、大学との連携による商店街の活性化が目をはくが、まさしく大学にとっての産学官連携を進める意義の第一は、地域や社会への貢献であると言える。一方、大学側の問題としては体制の不整備や連携マインド不足が指摘されている。

また、本書によれば、大学附属研究機関の多さや一大学あたりの科学研究費補助金採択状況が首都圏よりも上回っており、関西の国宝・重要文化財数は全国的にも突出している。こうしたデータから読み取れる関西の実績やポテンシャルを有効に活用しながら、産学官連携を推進していくことが、これからの大学には求められるのではないだろうか。

i) 2007年より「関西経済白書」

(石本倫子)

## 古西義磨氏寄贈 関西文化研究叢書1『関西文化の諸相』

(武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年)



武庫川女子大学関西文化研究センターでは、「関西圏の人間文化についての総合的研究」と題して、関西圏の人間文化のメカニズムを解明するために、文化形成のモチベーションの生起過程と維持の実態を明らかにすることを目的に研究が進められている。

本書は関西文化研究叢書の第1弾であり、関西文化を多方面から論じている。第1章では、「関西人間文化の諸相」と題して、関西圏の文化形成にかかわるキーワードを、西鶴作品を中心に見出している。第2章では「文化の尊重の諸相」をテーマとして、文学・語学の分野から、関西圏で尊重・重視されてきたものについて述べられている。第3章では、「文化の創造の諸相」として、関西が独自に創り上げた文化を絵画・服飾・食の面から迫っている。第4章は、「文化継承の諸相」というテーマのもとに、関西で育まれてきた文化の継承という観点から、文芸を中心に論じている。

人間文化を探るという意味では、当センターとも共通している部分がある。同じ関西を拠点にしている研究センターとして、本書で述べられているテーマから大いに学ぶべきことがあるのではないだろうか。

(中尾和昇)

## 図書紹介

堀井良殷氏寄贈 堀井良殷著『なにわ大阪興亡記—だから元気を出さないと—』（日本文学館、2007年）



大阪とは何か。本書は、大阪ブランドコミッティコラボレーションセンターチーフを勤める著者が、今の大阪が何故こうなっているのかを、全十二章をかけ徹底的に掘り下げる一冊である。

大阪は商人の町と言われるが、何故商人の町にならざるを得なかったのか。江戸時代には幕府に富を搾取されながらもそれに対抗するだけの勢力がなく、搾取され続けることに甘んじていたという、大阪人には少々耳の痛い話から本書は展開される。第三章からは国生み神話まで遡り、時代時代の難波、大坂、大阪という町が形成される過程を順に述べていく。その中で、大阪の問題と可能性、そして東京一極集中による大阪を含めた地方の疲弊の理由が明らかになっていく。この問題には大阪に住む人間が現状を正しく把握し、省みることから始めなければならない。最後の

第十二章で、大阪のアイデンティティをはっきりとさせ、関西州として自立していくことが必要だとして本書は締められており、暗いニュースばかりの現在に、ひとつの明るい光を見出せるだろう。

（影山陽子）

井上宏氏寄贈 井上宏編著『上方文化を探索する』（関西大学出版部、2008年）



「上方文化を探索する」という題名からふと思ひ浮かべたのは「上方歌舞伎」「上方落語」など伝統芸能にまつわる言葉であった。本書では、そうした歴史や伝統文化がイメージされる「上方」を意識しながら、現在の生活様式の基盤となる「新たな上方文化の姿」を提示した一冊である。本書は、(社)生活文化研究所「上方研究の会」(2001年発足)のメンバーが主に中心となって執筆したもので、月刊誌『ESTRELA』(財団法人全国統計協会発行)に連載された上方再発見を題材とする原稿をもとにして出版されたものである。

上方文化の再発見を軸として展開する本書の内容は、大阪・上町台地で育まれた歴史や文化、大阪の笑いやコミュニケーション、なにわの地で培われた町人学者の伝統、天王寺動物園の歩み、薬の道修町の今昔、上方の芸能、食文化など多岐にわたり、それぞれの分野で活躍する17人が独自の観点から筆を執り、きわめて多様な上方文化のとらえ方が示されている。そこに一貫して流れているのは、「上方」の懐古に留まらず、未来を見据えての再発見や新しい解釈をして、新たな「上方」を見つけていくという理念であり、それが「上方研究の会」発足の所以でもあった。上方文化を肌で感じ、現在の取り組みを大切にして過去を振り返り、未来を見据えて活動する執筆者たちはまさに「新たな上方文化の担い手」といえる。読者は、上方文化が伝統文化のみに見られるものではなく、ありふれた日常の中に広がり深く根ざしていることに気づかされる。また、身近なところから「上方文化」について考える貴重な機会となるだろう。

（藤岡 真衣）

## 図書紹介

永井芳和氏寄贈 千田稔編『関西を創造する』（和泉書院、上方文庫別巻シリーズ1、2008年）



「新しい関西を創る処方箋」、これは本書の帯に付された宣伝文句である。本書は、国際日本文化研究センターの3年間にわたる共同研究「『関西』史と『関西』計画」の成果であると同時に、産・官・学23名による大胆な「新しい関西への提言集」でもある。本書が、「処方箋」であるとするならば、病に対して投与する薬、つまり、問題解決のための方法が示されることになる。本書の内容は以下の通りである。

まず、「序説 関西のしんどさ」では、関西あるいは畿内の文化の基本は、「こまやかさ」であるとする。「こまやか」な伝統文化をもつ関西が、日本での新しい価値を創出することにつながると説く。続く「1. 水域の文化—生命と文芸の源流」、「2. 私鉄ネットワーク—沿線文化の再構築」、「3. 表現し発信する—ひたすら関西を語る」、「4. 歴史文化と観光—「日本的」なものを見せる」では、水（淀川や大阪湾）・私鉄・情報（メディア）・観光の4つ視点から、古代から現代にいたる関西の歴史や文化が論じられる。さらに、「5. 国土計画と関西—自立へのプログラム」、「6. 関西再生論の視点—創造のプロジェクト」では、大阪・京都・神戸など、個性豊かな諸地域がより連携を密にするべきであること、地域のしくみが異なる首都圏と比較するのではなく、関西の文化的基盤を積極的に生かすこと、などが提言されている。

本書は、関西のもつ多彩な歴史や文化の特質をまず捉えた上で、今日の関西が抱えている問題（病）を直視し、それに対して具体的かつ独自の視点から解決の方法（薬）を提示している。この点に本書の魅力があると私は思う。

（松永友和）

増田周子氏寄贈 竹村民郎・鈴木貞美編『関西モダニズム再考』（思文閣出版、2008年）



今、なぜ「モダニズム再考」なのか。しかも、「関西」という場所を限定しての再考である。

本書は、国際日本文化研究センターにおいて、2000年から三年間にわたってなされた共同研究「日本のモダニズム—関西を中心とした学術的研究—」の成果である。編者である竹村・鈴木両氏の論文の他に、12人の研究者が科学技術史、経済史、風俗生活史、そして芸術史などから「関西モダニズム」という大きな山の頂を目指して各方面からの登山を試みている。12人の研究者の中には、本学文学部准教授の増田周子氏が「大阪におけるカフェ文化と文藝運動—明治末から大正初期を中心として—」を執筆し、大阪のカフェ文化と東京のそれとを比較研究しており、興味深い。

それにしても誰がはじめに「モダニズム」と言い出し、そしてその時代を象徴するのに都合のいいように解釈されるようになったのだろうか。「『モダニズム』の語をもって語られる様ざまな現象」を一つに集約するというわけではなく、「各分野で全く別の意味で用いられる」ことを共通の認識とする試みが、この研究の大きな柱となっている。先ほど「『関西モダニズム』という大きな山の頂」と書いたが、道のりは簡単そうにみえて実は険しく、頂もあるいは幻であるかもしれない、と思わせるほど実体を捉えることが難しいのが「モダニズム」ではないだろうか。

しかし、山を登るために必要な道具は揃った。さて、どの道のりで行こうか。

（和住香織）

## 図書紹介

酒井亮介氏寄贈 酒井亮介著『<sup>ざこば</sup>雑喉場魚市場史 大阪の生魚流通』(成山堂書店、2008年)



本書は、著者の長年にわたる市場人としての経験と、魚市場についての絶え間ない探究心が生み出した一冊である。雑喉場に関する初めての概説書として、その意義は大きい。

本書の特徴として以下の三点を挙げることができる。①原始から現代までを貫く生魚流通への視点、②大坂（阪）およびその周辺地域の自然地理的環境をふまえた叙述、③大坂（阪）に生きた庶民の生魚流通を主体としていること。特に、近世では権力者による統制も、庶民の慣習や環境の実態に沿ったものとして描かれている点が大変興味深い。

本書が単なる魚市場についての概説書と異なるのは、「<sup>なまうを</sup>生魚」を一括りにせず、それぞれ個性をもつ魚として回遊時期・漁獲地域・調理法・取引方法にまで言及している点である。ここに著者の経験と生魚に対する豊富な知識が十分に活かされている。また、蠣船や出雲の鰻など瀬戸内・日本海地域の魚介類生産と大坂（阪）の食文化の関係や「<sup>いけじめ</sup>活メ」による美味しい魚の食べ方に触れるとともに、現代の食の問題点を指摘しており、魚食文化論としても読むことができる。

(生活文化遺産研究プロジェクト研究員 森本幾子)